
あいらぶぴっく！

みもこちと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あいらぶぴっく！

【Nコード】

N7288T

【作者名】

みもこちと

【あらすじ】

豚大好き！な花木紅葉はなき もみじはある日、デブな豚を拾ったので飼うことにしました。でもこの豚ちゃん、命名ぶう太はなんだか変で・・・。

あいみーとぴっく

豚ってかわいいと思う。

スタンプみたいな鼻とか、でっぷりしたお尻とか、あたたかくてかさついたピンクの肌とか。

白豚も黒豚も斑のある豚もどれも素晴らしく愛らしい。

なにより小さいながらも懸命に動く尻尾が大好きである。

私は幼い頃からいつか豚を飼いたいと思って過ごしてきた。

しかし現実的に考えて無理があったので、家にいるのは妹が親におねだりして買ってもらった黒いトイプードルである。

私はいつもテレビの中で動きまわる豚達を見ながら恋わずらいのようなため息をついていた。

そんなある日、私は豚を拾いました。

ミニブタじゃなくて、食肉用みたいな大きさの白い毛のぶつとい豚ちゃん。

道の真ん中でどてどてと鈍く歩いていたので、後ろから抱きついて前足の付け根に腕をまわして持ち上げてみたら、なんと全長が私の鼻の辺りまであった。

「でっけー!!」

興奮しながら豚の顔を覗き込む。

丸く黒い瞳がきよとした様子で私を見ていた。

「かわいいいいい!!」

叫びながら（近所迷惑）たぶん首であろう贅肉部分に頭をぐりぐりすると、豚はフゴツフゴツと鳴きながら短い前足を必死に振ってき

た。
ゆつくりと地面におろす。しかし羽交い締めするように私はしがみついたままだ。

拘束をちよつとだけ強めると豚はだんだんおとなしくなってきた。

「観念したかい豚ちゃん・・・？」

人生初の言葉責めを駆使しつつ薄っぺらい耳に口を当ててみたらまた暴れ出した。

ちよこざいな！と騒がしく攻防していたら、近所のお姉ちゃんに見つかった。

「ぎゃああー！ー！何やってんの紅葉もみじ！！野生の動物は変な病気を
持つてるかもしれないんだから触っちゃ駄目だって昔から言ってる
でしょうが！しかもよりによって豚！汚い！臭い！絶対病気持つて
る！早く離れなさい！！！」

やだやだあたしのだい！とどこかで聞いたような感じに抵抗してたら保健所の人を呼ばれた。

正しい行為なのだがひどい。

この辺りに養豚場なんかあったっけ？と首を傾げる保健所の人に泣く泣く豚を明け渡した。

あの豚ちゃんも元は元の場所で立派な豚肉になってしまふのだろうな・・・。

うん、今日の夜ご飯は豚肉のしょうが焼きにしよう。

私は、飼い犬の太ももを触りながら鳥のササミみたいだ今日はササミを茹でようと思える人間である。

とぼとぼと家に帰り姉ちゃんや保健所の人から念押しされたシャワーを浴びた。

そっぴいああ豚、なぜか石けんみたいな匂いがしてたなあ。

食事中に家族にこの話をすると二十にもなって何をやってるのかと母から怒鳴られた。

父は私が豚と出会ったことに吹き出し、妹は紅葉有り得ないとどん引きした。

姉を呼び捨てか銀杏いちょうよ。

「でもさ、食肉用の豚の耳に付いてるようなタグとか無かったんだよ。マジックで番号やアルファベットとかも書いてなかった。昔行った牧場のまさに家畜な臭いもなく、綺麗だったよ」

「それなら誰かが飼ってる豚だったのかもしれないな」

「関係ないわよ豚は汚いものの。まったく田中さんとこの菜々子ちゃんが通りがかってくれて本当良かった。迷惑かけたお詫びしたい」

「紅葉、ちゃんと病院で検査した方がいいんじゃない？」

「失礼な、私は健康体です」

ご飯の後で、皿洗いをしながら父の言うようにペットとして飼われている豚の可能性もあったんだなと考えた。

ここは近所の老人の家の鶏が朝日と共に鳴く田舎である。

近くにいたのだったら勇気を出して触らせてもらいに行きたいと思った。

私はあの豚に一目惚れしたようである。

夜、銀杏の抱き枕の大きさがあの豚と同じであることに気づいて、
銀杏が寝てる間に奪い取って抱きしめながら眠りについた。

あいみーとぴっぐ（後書き）

豚好き！をどうにか文字にしてみました。

ゆあねーむいずぶうた

次の日の土曜日、大学は休みバイトも休みということで畳でごろごろしてたら保健所から電話がかかってきた。

豚の引き取り手がなかったらしい。
思わずガッツポーズしてしまった。

保健所のお姉さんは昨日、私がいかに豚にご執心だったことで連絡をくれたのだそう。なんていい人・・・！

そして念のために携帯の電話番号を渡しておいた自分グッジョブ！

このままだと処分することになると言われたので、急いで引き取りに行った。

家族に相談なしで決めたのももちろん後に騒動となる。

車を三十分ほどとばして、私は遂に豚と感動の再会を果たした。
豚の方は檻の中で現状に気付いていないのか鼻ちようちんを出してのんきに寝ていたけどね。

私は檻を掴んで心のたけを叫ぶ。

「ぶう太会いたかったー！！」

「あれ？お宅の豚だったんですか？」

「いえ、今名付けました！」

昔飼っていた兎を母がうー太と呼んでいたので合わせてみた。

「ぶう太、ほら起つき！」

檻の鍵を開けてもらい、軽く叩いて起こしてみるとぶう太は何度かまばたきした後、猪のような勢いで私に突進してきた。

ひでぶ！とボケる余裕もなく私は後ろへ倒れ込む。

ぶう太は冷たい床の上に横たわるはめになった私の頬に鼻をブヒブヒとこすりつけてきた。

何この懐きよう。天国？

保健所のお姉さんが慌ててぶう太を押しつけて私を立たせる。

ぶう太は私の足というか膝部分にも鼻をすりつけてきた。

ジーンズが鼻水ででろでろになっているがかわいいから許す。

「な、懷かれてますね・・・」

「やっぱりそう見えます？昨日が初対面なんですけど」

若干引いている彼女と二人で首を傾げた。

ぶう太は暴れることなく、車の後部座席にどっしりと横になった。

下には保健所の人からもらったブルーシートを敷いてある。

迂闊にもケージを用意してなかったのでどう連れ帰ろうかと思つてたのだが、無用の心配だったらしい。

伝染病の有無などの検査は保健所がしてくれたようで健康だ。

でも、念のため犬で世話になつて動物病院でも診察してもらう。豚を診るのはじめてだわーと言われた。

ぶう太は車酔いすることもなく無事に我が家におりたった。ずっと私について回っている。

出掛ける際にケージに入れといた犬のクロ（オス）が私が帰ってきたのに気づいて吠えていたが、とりあえず今は放って置く。

ぶう太を家に入れようと思ったが、後ろ足を地面につけたまま持ち上げて引きずるわけにはいかない。

なので段差はクッションを置いて登ってもらいフローリングの廊下は私のバスタオル数枚を駆使してその上を歩いてもらった。

そして辿り着いた私の部屋！畳！

引っ掛けるだけの古い鍵を外して窓を開ける。

この部屋は縁側、庭と繋がってるのでいつでもぶう太を外に出してあげられるのだ。

動物が口に入れそうな物を急いで机の上に置いたり捨てたり押し入れに詰め込んだりする。

その間ぶう太はいい子にバスタオルの上に横ばいになって私を見ていた。

未だ諦めず吠え続けているクロとは大違いである。

「はい、ぶう太、この子はクロだよ。クロ、この子はぶう太。二人とも仲良くね」

掃除を終え、家族より先にクロとぶう太を対面させてみた。

クロは興奮気味に右へ左へ跳ねている。トイプードルならではの身軽さだ。

対してぶう太は体をまったく動かさず落ち着いてクロを見やっている。

王者の貫禄・・・！なんて思っているとクロがぶう太に近づいていき臭いを嗅いで、なんと頬辺りを舐めた。

ブギッとぶう太はまさに豚が潰れたような音を出してバスタオルの上に頭を落とした。

「ぶう太ー！ー！？ちょ、気絶・・・！そんなに怖かったの！？」

落ち着いていたわけではなく、びびって動けなくなっていたと判断するべきだろうか。

しかし自分の体の四分の一ほどの犬に舐められ気絶とはぶう太は相当な小心者のようだった。

ゆあねーむいずぶうた（後書き）

動物にyouは使わなかった気がするけど言わずもななっで。

まいふぁみりーいずすういーと

家族が帰ってきてバトルになった。

しかし意外にも父と妹はぶう太を飼うことに反対しなかった。ちゃんとしつけはしろと言われただけで終わる。

問題は母だった。潔癖症ってほどではないのだが汚い物は嫌いだ。

「なんで豚なんか引き取ってきたの！？豚にあげるご飯は無いからね！！さっさと返してきなさい！！」

心なしか体を縮めたように見えたぶう太の首に両手をまわして言う。

「いや。反対されても捨てない。ぶう太は保健所に返したら処分されちゃうんだよ。そんなの私は絶対やだ。ぶう太を飼うためのお金は全部バイト代から出すし、お母さんには迷惑かけないようにします。だからぶう太を家で飼うのを許してください」

できるだけ声を荒げないようにして頭を下げる。

熱くなりやすい母はこっちがおとなしくしていれば冷めるのも早い。予想通りそこまで言うなら・・・とあっさりぶう太を飼うのを認めてくれた。

その後は三人揃ってぶう太を撫でたり触ったりしてきた。ぶう太はじっとしている。

私はクロが走っていかないように抱っこしていた。

「思ってたより臭くないのね」

「調べたけどちゃんと世話してあげれば、そんなに酷い臭いはしな

いんだって。ぶう太は元から石けんみたいな臭いしてたから大丈夫だよ」

「ぶう太っておとなしいねー」

「おとなしいどころか。さっきクロに舐められて気絶してたよ」

「何それ！」

家族みんなで笑った。

ぶう太はなんだかふてくされたような音を鼻から出していた。

「豚って何食べるんだ？」

「雑食だから基本的には何でも食べるみたい。だから野菜とか果物とか」

「ねえドッグフードは？」

「お母さん達が帰る前に出してみたけど、ものすごい時間かけて食べてた」

キャベツやバナナなら凄い勢いで食べるのにクロのドッグフードは目の前にして固まっていた。

食わないかと思って下げようとしたら、決意を込めたような瞳で見上げられ、様子見にしたらのろのろと食べ始めた。

途中からクロに奪われたがまったく未練がないようで皿の前からどいた。

きつと苦手なんだろう。

無理して食べさせることもないので、今度は出さないことにした。

「もう食べさせてみたの？」

「うん。豚ってたくさん食べるイメージだったんだけど、ぶう太は私と同じぐらいしか食べないみたい」

このことは本当に嬉しい誤算であった。

ぶう太の食費はあまりかからない。
後は予防接種とかブラッシング用の器具とかだが、まあバイト代で賄えるだろう。

ちなみに私のバイトはスーパーの精肉・惣菜売り場である。日々、豚肉その他をパックして売りさばいている。

食べるのと愛するのは別物だということで、今日の晩ご飯は冷しゃぶである。

私が歩くとぶう太もどすどすと後をついて来るので家族は相当驚いたようだった。

「懷かれてるな、紅葉」

「クロにはよく咬まれてるのにね」

「うるさい！」

ちやぶ台のまわりに四人並んで座ると銀杏と私の間にぶう太が座った。
なにこのかわいい生き物。

「ぶう太ー、あーん」

思わずタレを漬ける前の豚肉を手で口へ運んでやり食べさせると、銀杏が共食い・・・！と戦慄した。

でもぶう太おいしそうだよ。

うぉんちゅーすりーぶういずみー？

煎餅布団を畳に敷く。

白地にツツジの花柄が散らばっているお気に入りだ。

ぶう太は風呂以外はずっと私についてくるので自然と私の部屋を寝床にすることに決まった。

風呂以外というのはぶう太はお湯が苦手なようで、豚はお湯大丈夫かなと思いつつ私が脱衣場で服を脱いでたら湯気を感じたのかいつの間にか後ろから消えていた。

バスタオルなしで走ったせいで蹄の滑るフローリングですっころんでいたのを見て怖がり過ぎだと笑ってしまった。

クロのことといい、小心者である。

結局、私が入浴した後になめるいお湯で湿らせたタオルで拭き、乾いたタオルで水気をとる方法で洗うことにした。

明日は動物用シャンプーを使って浴室で行おう。

そういえばぶう太はトイレに行きたくなくなると勝手に庭に出ているようになった。縁側からクロ用の板を使っておりている。

ちゃんと土を掘ってその中にしていたのを見て、目頭が熱くなった。クロなんてしつけに失敗しているので家中にマーキングしてやがるというのに・・・！

しかし蹄が土だらけになって洗うのが大変なので困っていたりもする。

話を寝床に戻すが、ぶう太用のケージはもちろん用意出来てない。いい子なのでバスタオルの上でも大丈夫かなとも思うのだが。

ちらりと自分の枕を見る。

抱き枕は今日の朝、怒りの銀杏に取り返されてしまった。

「・・・ぶう太、おいでー」

寝そべりながら掛け布団を持ち上げて、小さな声でぶう太を呼んでみた。

来なかったら潔く諦めよう。

ぶう太はちゃんと呼んでるのがわかったようでバスタオルから立ち上がり、こっちへ歩いてきた。

小さな白い尻尾が千切れそうなくらい振られている。

実は布団で寝たかったのか？

私の横に寄り添うように寝そべったぶう太に布団をかける。

そこで電気を消してなかったことに気づいて立ち上がって電灯に繋がる紐を引っ張った。

暗闇の中、布団に入る。

ぶう太に抱きついてみたが、嫌がられなかったなのでそのまま寝ることにした。

動物の体温って高くて心地いい。

うすばんやりした視界の中、ぶう太の目が緑に光った気がした。

翌朝、日曜日。

午前中バイトということのでついてきたがるぶう太を押し留めて家から出た。

忠犬ハチ公がごとく玄関で見送ってきたぶう公に心が締めつけられたよ！

バイトを終わらせて家に帰ると、魚屋やってるじいちゃんが訪れていた。

「豚飼ってたって？紅葉。食うときは言え、じいちゃんが捌いてやつから」

「いやいやじいちゃん！？私、ぶう太は食べないから！」

マグロも軽く解体出来る包丁を片手に言われたので本当に出来るかはともかく、ぶう太を抱きしめて震えてしまった。

冗談、冗談って笑って言われた。

うぉんちゅーすりーぶづいずみー？（後書き）

英語自信ないです！

ういーあーふぁっと

ぶう太を拾って一週間。

獣医さんにぶう太は太り過ぎかもしれないと言われてしまった。

確かにテレビで見る豚以上に頬の肉が垂れ下がっているとは思っていた。そこもかわいいんだけど。

しかし私自体、腹の肉がやばい気がする。
というわけで。

「一緒にダイエットしよう、ぶう太！」
「ヴイー！」

ご飯の量を減らすのは健康に良くないということで、早朝に散歩することにした。

クロの散歩は母と銀杏が交代でやってるので私はしたことなかったのだ。

購入した大きなハーネスをぶう太に取り付ける。
爽やかな空気の中、歩き出した。

同じく散歩してる人や新聞配達してる人など道行く人達に豚！？と驚かれながら進んで行く。

舗装されてない田舎道でも、ぶう太の固い蹄は軽々と砂利を踏んでいた。

坂を二、三通り過ぎ、最も長い坂を上がっていく。この坂を越えて下れば山のふもとに着く。そこで私は足を止めた。

ここには山からの湧き水がでている。

地元の人が常用していて、外から来た人が二リットルペットボトルに汲んでいくような天然水だ。

私は鞆から空のペットボトルとペット用の皿を取り出して、皿に水を注いでぶう太にあげた。

自分もペットボトルに水を入れて一気に飲み干す。

「生き返ったー！」

ついでにペットボトルに汲んだ水を顔にも浴びせた。

ぶう太が自分もお願いというように鼻をすりつけてきたので、ぶう太にもかけてやる。

ボロいベンチに座って休憩していると、ぶう太が一心にどこかを見ていることに気づいた。

視線を辿ると、小川がある。

今時では珍しい泳ぐことができるような、濁っていて生き物が住む川だ。

「ぶう太、川に入りたいの？」

ぶう太はぱつと私を見て、また川に視線を戻し、しかし振り切るように川とは反対の方向の私達の家へ歩き出した。

「わわ、いいの？まだ時間あるから入っても大丈夫だよ？」

ぶう太は決して振り向かないまま私を引っ張るように進んだ。

一人じゃ続かないダイエットも一緒に頑張る相手がいるなら続くもので。

早朝の散歩は日課となり、特別な理由が無い限り毎日行われた。

私は腰回りが多少細くなった程度だったが、ぶう太は見事にスリムになった。
散歩で顔見知りになった人達が、ぶう太やせたねえと声をかけてくれる。

そのたび、ぶう太が誇らしげに顎を上げるので笑ってしまった。

小川をぶう太が一心に見つめるのもいつものことだった。
決して入ろうとしないのも。

そんなことしてる内にいつの間にか、ぶう太が来てからはじめての夏休みに突入していた。

あいせいぐつばい

夏休みに入ったからといっても何かが変わることはなく、ただ、ぶう太と過ごす時間が少し増えたように感じた。

バイトのない日はぶう太と庭に繋がる縁側で昼寝している。茂った梅の木が大きな影をつくって私達を覆っていた。

ある日、事件は起こった。

早朝の散歩でいつも顔を合わせていた新聞配達のお兄さんから告白されてしまったのだ。

「返事はいつでもいいから」

はじめての出来事に焦ってしどろもどろになっていた私にお兄さんはそう言い、自転車に乗って去っていった。

「どうしよう、ぶう太、私、告白なんてされたのはじめてだよ」

困っている私に、ぶう太はブギともヴィーとも鳴いてくれない。ただいつもより速く山へ歩いている気がした。

山のふもとで天然水を皿に注いで、でもぶう太は水を飲んでくれなかった。

ただ小川を見つめている。

ぶう太が初めて川の方へ歩き出した。
私の心臓はなぜかさっきの告白よりドキドキしていた。ぶう太、どこに行くの？

「駄目、ぶう太、その水は飲んだらお腹壊しちゃうかもしれないよ。喉が渴いてるならこっちおいで」

必死にハーネスを引っ張って止める。

絶対に止めないといけない気がしたのだ。

ぶう太は川の直前で立ち止まって、私を振り向いた。
青い水面の光が反射して、ぶう太の目が緑に見える。まばたきするとすぐに元の黒になった。錯覚？

「ぶう太、帰ろう。そっちに言ったら駄目」

ぶう太はブ、と返事するように鳴いて、私の所に戻ってきた。
ほっとして地面に膝をつく。

ぶう太が鼻を私の目元に押し付けてきた。私は泣いていたようだった。
た。

夜、暑いので変えた青色のブランケットをいつものように開いても、ぶう太は入ってくれなかった。

すぐ近くでお座りしている。

私もぶう太の前で正座して座ってみた。
背中にすごく緊張した時と同じように冷や汗が流れていた。暑いはずなのにひどく寒かった。

「・・・ぶう太!？」

急にぶう太の瞳から涙が零れた。

豚って泣くの???

しかし今まさにぶう太の瞳からは一粒、二粒、と緑の雫が――。

ああ、ぶう太の目はもう見間違えようがないほど透き通った緑になっていた。

「泣かないで、ぶう太。何が悲しいの？」

ピスピスブグブグと鼻が鳴らしているが、何を言っているのか、わからない。

人と豚じゃ、通じ合えない。

私まで悲しくなってきた。

でもどうにかぶう太の涙を止めたくて、私は緑の瞳のそばにキスをした。

ぶう太がやってくれたように、涙をぬぐえるようにキスをした。

ぶう太をぎゅうと抱きしめて、私はそのまま眠ってしまった。

夢に入る直前に耳に入ったぶう太の鳴き声は懺悔のように聞こえた。

早朝の散歩、目に痛いほど真っ青な空には大きな入道雲が浮かんでいた。きつと雨になるのだろうか。土砂降りの、水が溢れるほどの雨に。

新聞配達のお兄さんには会わなかった。

私は確かに聞いたはずの彼の名前を思いだせないのだから、それが全てだろう。

ぶう太と私はただ一心に山のふもとへ向かっていた。

天然水を飲んで、古ぼけたベンチで一休みして、昨日夜遅かったせうか、私の頭はぼんやりしていて、いつの間にか手からハーネスが抜けていたことに気づけなかった。

ポチャン！と重いものが水に投げ入れられたような音に頭が覚醒する。

私の前にぶう太はいなかった。

「ぶう太ー！！」

小川に向かって走る。

転げ落ちるように草の間を下る。

何も考えられなかった。嘘だ。

わかっていた。ぶう太がただの豚じゃないなんて。はじめて緑の瞳を見た夜からずっとわかっていた。

今、ここに飛び込んだら、きつと帰れないことも私はわかっている。そして、今を逃せば、二度とぶう太に会えないだろうこともわかっている。

私はまだ聞けてない。

涙の理由を聞けてないのだ。

目をつむれば家族の顔が浮かぶ。

後悔は一瞬、いや一生かな。

でも、私はぶう太を捨てられない。

私は目を開き、濁って緑にも見える小川に飛び込んだ。

あいせいぐっばい(後書き)

次はトリップです。

A r e y o u B u t a ?

私は見慣れない小川のほとりにやっとこさたどり着いていた。服は水に濡れて張りついている。

予想以上に大変な道のりだったので、ぶう太に会えないまま力尽きるかと思つたよ。

きしむ体をどうにか動かす。

その場に寝転んで空を見れば、なんだかパステルのような水色をしていて太陽らしきものの色はクレヨンのおレンジだった。

うまく異世界つてやつに辿りついたのか、はたまたあの世か。こんなファンシーなあの世はちょっとやだ。

風はそよそよと穏やかに吹いている、私の状況に反して。

日向はあたたかいのだが、濡れた体には少し厳しい。

早く移動しよう。

油断すれば眠つてしまいそうな頭を振って起こす。

体を反転させて、整えられたようなクレヨン黄緑な草の上を這いつていると、ふいに影がさし、大きな手に腕を取られた。

「モミジ！」

こんな変な場所で私の名前を知ってるなんて一人しかいないよね、たぶん。

「ぶう太・・・？」

会えたのが嬉しくて、笑いながら顔を上げて、私はそのまま固まっ

た。

視界に入ったのは、長いまつぐな白髪をひとつに結んだ、ぶう太と同じ緑の眼をした、とんでもない美形の青年だった。

服装は昔学校で見た古い洋画で田舎の偉そうな人が着ていた者と似ている。

なんか花背負ってません？幻覚ですか、そうですか。

おいちょっと待て私の豚のぶう太君はどこいった。

「モミジ・・・！良かった、モミジ、無事で・・・！」

とんでもねえ美形は人の名前を連呼しながら私を抱きしめてきた。濡れるのにも構わず密着する。

ついで片手は私の腰を寄せ、もう片手で頭を固定して顔に鼻をすりつけてきた。

ほぼ初対面としか思えない顔の男から過剰なスキンシップを受けて私は恐慌状態になった。

ぶう太ー！助けてー！！

「ぶ、ぶう太ー！」

「ああ」

「あんたじゃない！豚のぶう太ー！」

「私が豚のブウタだ。モミジのブウタ」

そんな訳あるか！ぶう太はちょい太っちょで小心者の泣き虫だぞ！例え間違えて人間になったとしてもこんな劇的な変化を遂げるものか！

なんてことを伝えてみると、美形は瞳をやわらかく細めて、私の目にキスしてきた。なんでやねん！！！！

低く優しい声で囁かれる。

「デブで犬が苦手な小心者で君が欲しいと泣いた泣き虫、その通りだ。だが一つ訂正がある。私達は一緒に“だいえつ”とやらをしただろう？ 痩せたブウタは誇らしげだっただろう？ 君の為に頑張ったんだ」

「・・・・・・・・」

ぐうの音も出ない。

自称ぶう太は私の頬を両手で包んで額に額を合わせた。近い。近すぎる。ちよつとよろけたらキスしてしまう距離だ。

私は暴れようとしたけど、ぶう太にそっくりな緑の瞳が私の動きを止める。

「モミジ、会いたかった。ずっと君にこの手で触れたかった」

熱のこもった瞳と言葉に、私の容量は限界に達して、あっさり気を失った。

S h e i s a p r e t t y l i t t l e g i r l .

私はどうやら夢を見ているらしい。

夢を夢と判断できたのは初めてだ。

雪山でベビーカー押して歩くとか友人が天井にはりついていたりとか、
どんなに奇怪なことが起こっても寝ている限り私はそれを現実だと思
い込んでいた。

でも、さすがにこれはない。

飼っていたブタは美形のお兄さんでしたなんて絶対有り得ない。

更にそれが私を抱きしめて告白まがいをしてくるなんてなおさらだ！

カエルの王さまみたいに魔女に呪いをかけられてたともいうのだ
ろうか。

でも彼だって異世界にまでは行かなかったぞ。せいぜい隣国ぐらい。

たぶん私は草原で寝てしまったのだろう。そのまま夢を見てるのだ。
間抜けすぎる。

早くぶう太を見つけないきゃ。

ぼんやりと目を開く。

飛び込んできたのは予想していた空でも草でもなく、黒だった。

「・・・・・・・・・・？」

状況が把握出来ない。なぜ、黒。

黒は私の戸惑いをよそにパチパチとまばたきして、あ、これ眼だ。近すぎてわからなかった。

頭を少し後ろへずらして視界を広げる。

眼の持ち主はかわいい女の子だった。大きな黒い眼が同じ色の長いまつげに縁取られている。

真っ白な肌の顔が、にこっと微笑む。つられて私も笑みを返す。

私はベッドで横になっているようだ。

少女は私の顔のすぐそばに顎を置いて寝そべっている。彼女の真っ直ぐな黒髪が白いシャツに散らばっていた。

女の子は微笑んだまま、私の頭に手を伸ばしていい子いい子するよに撫でる。

「おはよう、お姫さま」

透き通るような声で小さく彼女は言った。

お姫さま？誰が？

私の問いが彼女に届くことはなかった。なぜか声が出ない。ぱくぱくと餌を食べる鯉みたいに口だけが動いている。

「しゃべっちゃダメ」

女の子はしい、と指を桃色の唇に押し当てて、もう片手で私の足元付近を指差した。

「起きちゃう」

首だけ動かしてそちらを見れば、白いベッドに同化するように白い頭が乗っかっている。

じ、自称ぶう太だー！！顔は見えないけどたぶんそうだ！
夢の世界から飛び出して来やがったのかこの野郎！

心の中で暴れつつも熟睡しているらしい自称ぶう太の全体を見た。
彼は床に座りながら、肩より上だけベッドに寄りかかって顔を伏せている。

・・・顔が見えてなくて良かった。健気な少女のように寝ずの看病してたら眠っちゃった　みたいな姿を彼がしているのを直視するのは少々つらい。

「アダンはね、あなたをずっと見てたのよ」

視線を横へ戻す。少女はくすくすと可愛らしく微笑んでいた。

自称ぶう太、どうやら名前はアダンに寝顔をガン見されてたということだろうか。勘弁してほしい。

私の微妙な心情を知ってか知らずが少女はやけに嬉しそうな様子だ。

「そろそろ行かなきゃ」

少女がベッドに両手をつけて立ち上がる。私の目にはピンクの小さな靴が見えた。

べ、ベッドに土足で乗っちゃいけませんよお嬢ちゃん!?

彼女は笑いながら五歩ほど後ろ歩きし（でかいなこのベッド!）ジャンプで床におりた。音はまったくしなかった。まるで猫みたいな子だ。

「私のことアダンには内緒よ。また会いにくるからそのときはお姫さまの名前を教えてね」

思わず頷くと少女は満足そうに笑って私に背を向けた。桃色のエプロンドレスをひらひらさせて歩く。

向かった先には大きな窓。

いやいやまさかと思いながら見ていると少女は走り出して窓にぶつかっていった。

「えええええー!?!」

あ、声が出る、ってそれどころじゃない!美少女がスプラッタに・・!

しかし予想していた惨劇は起こらず、窓は少女がぶつかる前にひとりでに開いた。窓枠に足を乗せて軽やかに外へ出る。少女の姿はすぐに下へ消えた。

・・・ここ、何階だっけ?

S h e i s a p r e t t y l i t t l e g i r l . (後書き)

ブタ成分が足りない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7288t/>

あいらぶぴっく！

2011年6月15日16時57分発行